セルビアは親日家、、、？

皆さん、Dobar dan(ドバルダーン)！
東洋英和女学院大学の学生３名でお届けしております！
セルビアについての知識が全くなかった私たちが、セルビアに関わる皆様の温かさのおかげで、この記事を作成することができました。セルビアのホストタウンである皆さんに少しでもセルビアについてより知っていただけたら嬉しいです。

１．セルビアについて
皆さんは、セルビアがどこにあるかご存知ですか？

正式名称はセルビア共和国（Republic of Serbia）です。
セルビアはヨーロッパのバルカン半島に位置しています。

首都はベオグラード（図1）です。とても綺麗ですよね。

図1. ベオグラード中心部　© National Tourism organisation of Serbia

実はセルビアと日本は友好関係にあります。1882年にセルビア王ミラン・オブレノビッチ１世と明治天皇が親書を交わし、セルビアと日本の交友関係が築かれたことをきっかけに、今もなお、お互いに助け合っています。

私たちは、東洋英和女学院大学の「国際教養セミナー」を受講している学生3名です。
本授業は駐日セルビア共和国大使館との連携科目であり、同大使館のミッションのひとつである「日本人にセルビアを知ってもらう」という活動目的を共有しています。それゆえ、その一助となるべく、学生が同国について学び、主体的に広報を実践しています。

この授業は、駐日セルビア共和国大使館の全面的なバックアップにより、2016年度から始まったPBL（Project-Based　Learning)です。私たちは、9月30日にセルビア共和国大使館に訪問し、臨時代理大使であるイヴァナ・ゴルボヴィッチ・ドゥボカ公使参事官にもお会いすることができました。大使館では、大使館の仕事内容、セルビアの文化、宗教などのお話を伺いました。

私たちは「セルビアは親日家である」ということを大使館でお聞きし、非常に驚きました。
そこで、私たちは「セルビアは親日家である」ということを取り上げ、記事を作成することにしました。

２．黄色いバスに興味をもって・・・

私たちは「セルビアが親日家である」ということについて詳しく調べていたところ、
『セルビアを知るための60章』（図2）という書籍に記載されていた、坪田哲哉　参事官が書かれた黄色いバスついての記事を拝見し、黄色いバスに非常に興味を持ちました。

そこで、執筆者のひとりである在セルビア日本大使館　坪田哲哉　参事官にインタビューをさせていただきました。

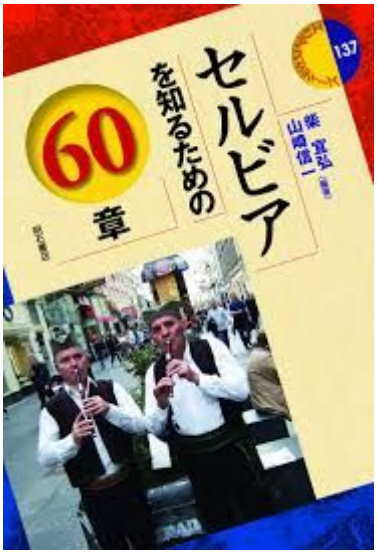

図２．柴宜弘・山崎信一（2015）『セルビアを知るための60章』明石書店

―坪田さんが在セルビア日本大使館にお勤めすることになった経緯を教えていただけますか。

「私は、１９８０年代の後半に学生時代を過ごし、大学では国際政治を専攻していましたが、ちょうど東欧の社会主義国の体制崩壊とそれに続くソビエト連邦の崩壊等といった歴史的な出来事が起こったときでした。そのような時期であったからこそ、ソビエト連邦や東欧という地

域に強い関心を持ったのです。１９９１年に私が外務省に入省した際に、自分の研修語がセルビア語に決定し、そのようにしてセルビア語、そして、当時はユーゴスラビアの一部でしたが、セルビアという国との付き合いが始まりました。その後、ベオグラードにある日本大使館に３回にわたって勤務し、セルビアでの滞在期間は合計１３年を超えました。今も、ベオグラードにある日本大使館で３回目の勤務に就いており、セルビアでの生活を楽しんでいます。」

3.　セルビアは親日家？

皆さんはセルビア人が親日家であることをご存知ですか？
日本ではあまり知られていませんが、実はセルビアは親日家なのです！

一日本人はセルビアについてあまり知っている人がいないのですが、私
たち日本人にセルビアを広めるにあたって伝えて欲しいことは何でしょうか。

「旧ユーゴ紛争の解決に奮闘する日本人、そして、『黄色いバス』に象徴される日本による対セルビア支援、これらの要素が相乗効果を発揮して、セルビアにおける親日感情を高めてくれたのだと思います。

旧ユーゴ紛争が発生したこととその後のセルビアの復興・発展支援が必要であったという悲しい現実が存在するということを忘れてはならず、日本とセルビアの間の関係を考える上では、それを避けて通ることはできません。

人間どうしの関係もそうですが、本当に困っている時、どうしようもない苦境にある時に助けてくれる人こそ、真の友人ということなのでしょう。『まさかの時の友こそ真の友』といいますが、そういう時の助け合いが友情や絆を深めることはよくあります。

*２０１１年の東日本大震災のとき、そして、２０１８年の西日本集中豪雨の際は、セルビア*は*世界の国々に先駆けて日本に対して支援の手を差しのべてくれました。*

また、２０１４年のセルビアにおける集中豪雨の際には、日本政府もセルビアに支援を行いました。このように、日本とセルビアの間には、平時のみならず、困ったときに助け合えるという関係ができているといえます。」

図３．日本国旗に寄せ書きするベオグラード市民（2011年）

4.　首都ベオグラードの「黄色いバス」、実は日本からのものだった⁉

皆さん、首都ベオグラードには日本が供与した「黄色いバス」（図４）が走っていることをご存じでしょうか？

実はこのバスが、セルビアが親日である大きな要因でもあるのです。2000年のセルビア民主化以降、日本も含め国際社会がこぞってセルビアへの経済支援をはじめました。日本は多くの支援を行い、その中でも代表的なのが2003年にベオグラード市に供与した93台の「黄色いバス」です。

図４．通称ヤパーナッツ（JAPANAC）。車体には日本とセルビアの国旗が描かれている。

―「黄色いバス」が到着した当時、国民はどのような反応を示したのでしょうか。

「正直申し上げて、黄色いバスのインパクトはとても大きかったと思います。先述のとおり、２０００年のセルビア民主化以降、国際社会はセルビアの安定はバルカン全体の安定に資すると考えて、紛争や経済制裁によって悪化したセルビアの状況を改善するために経済支援を開始し、各国は色々な支援を行いました。バスや市電等を寄贈した国もありましたが、いずれも使い古した中古品をセルビアに供与するといった形が一般的な中にあって、日本はセルビアの首都のベオグラードにおけるより快適で安全な交通網の整備を目指して、９３台の新車のバスをベオグラード市に寄贈したのです。

地下鉄の通っていないベオグラードの交通の主役は、バスです。それまでは　故障やパンクが絶えなかったベオグラード市のバスを中心とする交通事情は非常に悪いと言わざるを得ず、本数の少なさや車両の老朽化が大きな課題となっていました。そこに、当時のベオグラード市が保有するバスの約１割に当たる　９３台の新車のバスが日本の支援で投入されたことにより、バスをめぐる交通事情は大きく改善しました。ベオグラード市民は、他のバスをやり過ごしてでも、日本の支援によるバスを待って、それを利用したと聞いています。日本が寄贈したバスによって、より快適かつ安全な通勤・通学・帰宅の手段が確保されたといえ、それは、セルビアの人々に将来への希望を与えたといっても過言ではないと思っています。」

そもそもバスが寄贈された理由は、市民・難民にとって安価で重要な移動手段であったバス交通の発展に寄与するためでした。そして実際にバス交通は大きく改善しました。しかし「黄色いバス」が与えた影響は、それだけにとどまらなかったようです。

—バスが寄贈されて、どのような変化を現地で感じましたか。

「実際にベオグラード市交通局の担当者が私に語ってくれたことなのですが、日本が本当の意味で贈ってくれたのは新車のバスではなく、バスの点検・　保持の重要性ということだったということです。即ち、新しいものを使うことは簡単ですし、そして、どんなものでも老朽化するわけですが、それをいかに長く大切に使うか、それが重要であるということに気づかされたということです。勿論、我々としても、日本国民の方々の税金を原資とする開発協力でバスを寄贈できたので、きちんと適正に使っていただきたいという要請はしていました。

ベオグラード市は、バスをいかに大切に使うか頭をめぐらし、その結果、日本が寄贈したバスのために専用の点検や清掃の設備を設け、他のバスよりも念入りに手入れする体制を整えました。その後、ベオグラード市は、そのような念入りな点検や清掃の設備を他の全てのバスにも使えるようにしました。その結果、ベオグラードを走るバスの安全性や快適さは全体的に大きく向上したといわれています。即ち、日本によるバスの寄贈が発端となって、ベオグラード市全体の交通状況が向上したといえます。」

「黄色いバス」供与から17年たった今、セルビアでは新たな交通手段が計画されているようです。最後に坪田さんは、そんなセルビアで発展する公共交通機関への思いを語ってくださいました。

「ベオグラードには現在、長年の悲願であった地下鉄の建設計画が具体化しつつありますので、交通の状況は将来的に飛躍的に改善することが見込まれます。是非とも、日本が寄贈したバスから学んだ精神をいつまでも忘れずに、更に快適な交通網の整備を進めていってもらいたい、バスの寄贈から２０年近くが経った今でも、元気に走り続けるバスの姿を見るたびに、そのように思います。」

—最後に、残念なことに日本人はセルビアについてあまり知っている人が少ないという印象があります。セルビアについて日本の方々に知ってもらいたいことは何ですか？

「日本から遠く離れたセルビアに、こんなに日本のことが好きで、単に日本が好きというだけでなく、日本に災害が起これば金銭的な支援を惜しまなかったり、日頃から日本の武道に励んでいる人々がいるということは、我々日本人としてとても誇りに思うべきだと思いますし、日

本人としてもセルビアをもっとよく知り、セルビアの人々と交流することを通じて、そのような友情を大切に育んでいく必要があると思います。」

セルビアでは日本人が思う以上に、日本のことを思ってくれている方々がいます。坪田さんがおっしゃるように、そのことを私たち日本人はもっと知る必要があります。知ることが両国の友情をより深めていくきっかけになるのではないでしょうか。

＝＝

取材者：東洋英和女学院大学2年　「国際教養セミナー」受講者

・鈴木里菜
私は初め、セルビアがどこにあるのかも知りませんでした。セルビアが親日家であり、日本と深い友好関係があるということを知り、本当に驚きました。この記事の作成を進めていくに連れて、いかにセルビアの方々が日本が好きなのかということを身に染みて感ました。また、セルビアに関わる様々な人の温かさを感じました。私たちが、セルビアについてたくさん学ぶことができたのは、セルビアに関わる方達の温かさのおかげです。より多くの日本人がセルビアに興味を持って欲しいです。より多くの日本人がセルビアに関わる方達の温かさに気づいて欲しいと思います。

・石塚春生
今回のインタビューを作成するにあたってまず、セルビアと日本の関係が深いことを初めて知ったところからスタートしました。お互いの国を助け合う精神が存在し実際に行動し合うことは、国際関係において非常に友好関係をもたらすことに気付かされました。また、今回は日本側の支援である「黄色いバス」に着眼して調査してきましたが、セルビア側の支援についても知る必要があると感じました。人々同士に和をもたらすのは、助け合い精神を持った国際関係を大切にすることだと考えました。

・鈴木葉月
私は最初、ベオグラードに日本が供与したバス（黄色いバス）があると知ったとき、一気にセルビアへの親近感が高まりました。同じように多くの日本人にもセルビアへの親近感を持ってもらいたい。そう考え、セルビアが親日であることを知っていただくために、私たちは記事を作成しました。少しでも多くの方がセルビアへ興味をもってもらえたらうれしいです。そしてより多くの人がセルビアへ関心を持つことが、今後の両国の友好関係を発展させていくには重要なことだと思います。